フィールド（現場）からの風 ⑥29

宮田守男

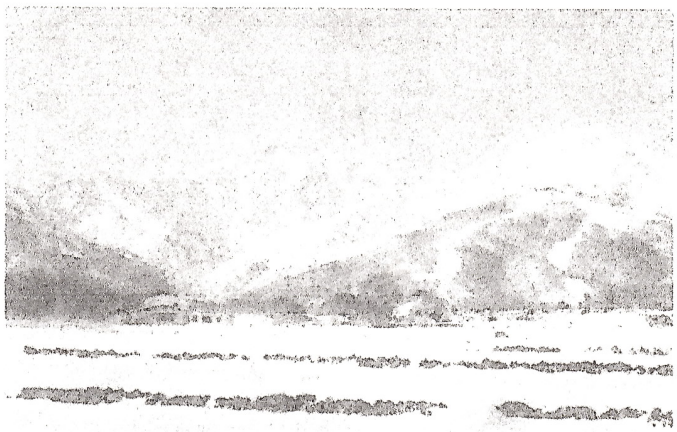
連日報道される白馬エリアの経済情報。注目されるエリアだからこそ「一期一会」の心掛けを大切にしたい。「一期一会」とは、茶会では毎回、一生一度と考え、客に尽くすべきとの茶道の心得。転じて、出会いの大切さを説く言葉だ。今日という日は再びなく、会った人と再び会えるとは限らないと。SNSなどの情報手段により、好ましくない情報は世界に瞬く間に発信される時代だが、逆に言えば魅力を発信できる事も事実だからこそ地域関係者に委ねられたサービスの向上は重要だ。

中国の歴史書「三国志」の中で師が弟子を諭す言葉に「読書参与」がある。読書に適した三つの時期・時間で、一年のうちでは冬、一日の中では夜、それから雨降りの時間。教えに従えば冬の夜こそ読書にうってつけ。読書離れが言われている日々だからこそ、年末年始には手元に一冊の本を置き読みたいものだ。その思いが地域に充実した図書館整備の動きになるに違いない。

持続的な試行の積み重ねの意識を大切に

人材不足や多様な食事スタイルを求めた「泊食分離」の動きが活発になっている。この予想は既に40年前から論議されたテーマだった。当時八方エリアの若手経営者との懇談で、夜間の外出は寒くて無理なので、地下道を整備して各宿では食事は提供せず魅力ある食事エリアを整備してはとのアイデアがあった。

当時の工事費概算で1㍍当たり100万円、3㌔の地下道完成で30億円での実現可能かと熱心な話し合いを行った記憶がある。当時はスキーができれば、泊まるところはスキー場に近ければ近いほど良いと言われた時代だ。だが若手経営者は、食事内容にこだわる顧客が増える場合を想定して、わが宿では対応できるスタッフも設備もなく、宿個別に対応しても数千万円単位の投資が必要で、多くの宿が同意すれば不可能ではないと論議が盛り上った。



山岳美が堪能できるエリアの農地以外の土地利用の可能性を期待する声が高まる

だが家族等に構想を話したところ、論議さえできなかったとの声が多かった。スキー産業の低迷もあり、数多くの営業施設は外部資本に売却され、地域を開発した当初関係者が激減していることも事実だ。当時の構想が実現していたらと想いを馳せてしまう。

発明王エディソンの「最大の弱点は諦める事。常にもう一回試してみる事」がある。何度も挑戦し続ける地域で有りたいものだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）